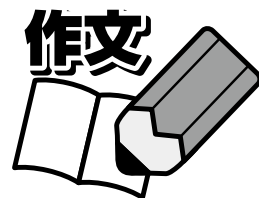


全国コンクール 優秀賞

群馬県コンクール 金賞



里山のおにぎり

前橋市立第一中学校 1年 萩原 言羽

電車を乗り換えると、ボックス席の窓側に座って、わくわくしながら発車を待つ。毎年、夏休みに祖父母の家に滞在することは、私にとって最大のごほうび。それはすでに、この車窓の眺めから始まっている。何駅か過ぎると、いきなり目の前が一面青々とした田んぼに変わるのだ。その片隅で、白さぎの家族が電車で驚いて飛び立ったかと思うと、向こうにはなだらかなおとぎ話のような山々。川が現れる度、電車の音はタ、タン、タ、タンと軽くなる。そのうち、祖父母の待つ小さな駅に着くのだ。「おかえり。」と必ず祖父は言う。久しぶりで少し照れながら、私達も「ただいま。」と答える。私達家族が、この緑にあふれる夏の光景の一部になった瞬間だ。

祖父母の家は、山と田んぼに囲まれた集落にあり、いつ来てもなつかしく落ち着く場所だ。特に夏は、田んぼの稲ものびやかに青く、夕方には青田風が吹いてきて、他の季節とはまた違うさわやかな生命力が心地いい。

家に着くのも早々に、祖母はお手製の自慢の梅干しを見せてくれる。涼しい味噌蔵に大きさに別々に大切にしまっているなかでも、「特大」の梅干しがびっしり詰まっている甕にはびっくりした。この梅干しは、私の家にもよく送ってくれて、疲れた時やお腹が痛い時、お湯に入れてくずして飲むと、あっという間に元気になる。でも、やっぱり、祖母の梅干しはおにぎりにするのが一番おいしい。

そのおにぎりのお米も、近所にある祖父の田んぼで作られたものだ。祖父自身はもう米作りは止めてしまったけれど、知り合いに貸すことで、祖父の田んぼはまだ生きている。作る人が変わっても、お米のおいしさは変わらない。その祖父の田んぼで作ったお米と祖母の梅干しでおにぎりを作ると、暑くて食欲が落ちた時でも、するっと食べられてしまうのだからすごい。祖父の田んぼでとれたお米は、炊くと夏の雲のように白くて、冷めても噛みごたえがしっかりあって、やさしい甘みが最高なのだ。

夕方になると、祖父の畑のオクラを収穫した後、八月に入った田んぼの横を散歩する。稲穂が黄色く色づいてきている田んぼもあって、新米を思うと胸が高鳴った。随分赤とんぼが飛んでいて、暑いなかにも秋が近づいていることを知る。一方で、近くの柿畑・梅畑からはシャワーのような蝉の声。ここにあるのは、生活に根ざした山、その恵みを受ける集落、その前に広がる田畑…。私の頭に、ふと「里山」という言葉が降ってきた。そうか、ここは里山に守られた里なのだ。私がいつもこの場所にいやされ、何度でも来たくなるのは、ここが人の生き方の昔から続く形を、最も美しく留めている場所だからに違いない。

日本中の、里山に守られた暮らしが、ずっと続いてほしいと願う。調べてみると、各地で里山体験という、田植えや稲刈り、木の伐採や自然観察などをするイベントが開きされていて、こうした楽しい試みは、将来的に農業にたずさわる人材を増やすことにもつながるだろう。私も毎年、祖父母の家で大きな意味での里山体験をしているが、将来の選択肢の中に、里山での暮らしというものも確かにある。

また、米を作る人の確保とともに、米を食べる人を増やすことも、米作りを守っていく上で大切な課題だ。最近の酷暑は、私達から体力や気力をうばうが、そんな時こそ、お米や梅干し、味噌、甘酒といった日本の伝統食を積極的に取り入れ、力をつけたい。

今、私は自宅に戻ってきている。大好きな祖父母にまたしばらく会えないのかと思うとさびしいけれど、祖父の田んぼのお米と祖母の梅干しで作った里山のおにぎりを食べて、元気に過ごそう。そして、私も祖父母のように、何かを通して誰かに元気を届けられるような人になりたいと思う。